



## Kobe University Repository : Kernel

タイトル Title	海路の賑わい : 当館所蔵の航路図付航路記(その2)(Flourish of Seaways - Voyage with Rout-Maps Maritime Museum Storing (2nd Report) -)
著者 Author(s)	樋口, 元巳
掲載誌・巻号・ページ Citation	海事博物館研究年報,34:8-17
刊行日 Issue date	2006-03
資源タイプ Resource Type	Departmental Bulletin Paper / 紀要論文
版区分 Resource Version	publisher
権利 Rights	
DOI	
URL	<a href="http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81005648">http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81005648</a>

Create Date: 2017-12-17



# 海路の賑わい

## —当館所蔵の航路図付航路記（その2）—

樋口元巳

### 一枚物・大型折本・屏風の部

英国ウェストミンスター宮殿の文書保管庫の様子が紹介されているテレビ番組を観た事がある。くるくると巻いて保管されている文書が積み重ねられている。羊皮紙の文書である。羊皮紙の文書は巻いて保管しているのだ。大航海時代に持参した地図は羊皮紙に書かれていたものだろう。普段はくるくると巻いて所持保管されていて、見る時にはこれを広げて見る。

吉良家の屋敷絵図面は紙に書かれて折り畳まれていた。見る際には広げるのである。和楽路屋の神戸市街地図は折り畳みである。五万分の一は1枚で売っているが、手に入れて保存する時は折り畳む。広げれば1枚になる。双六は江戸時代から折り畳んで売り出された。遊ぶ時には勿論広げて遊ぶ。輿地図と呼ばれた幕末明治の地図は大きいものだから折り畳んでいる。巻いているものもある。伊能忠敬の地図も畳んで保存した。

折り畳み方に2通りがある。山折り谷折りを等間隔に繰り返せば折本形式である。屏風はこのやり方である。大きいものはそれを縦に3つにも4つにも折って保存する。又これとは別に半分ずつに順々に折り重ねて行くやり方もある。折り畳んだ上下に補強のため原紙の表紙を付ける事もする。

折り畳む代わりに掛軸にする方法もある。横に長く連続するのであれば御経のように折本でもよい。ある程度の大きさのものを一望の下に見るには、床に広げるか、上から吊り下げるという事になる。屏風は本来1枚であったものが取り扱いに不便なゆえ屏風形式が生まれたという。大きな折本みたいなものである。屏風仕立の航路図には吊り屏風と称して船内に掛けて実用に供されるものがあると云うが、本館にはこれに相当するものはない。

掛軸や屏風は実用向きでないようにも思われるが、実用の例がない訳ではない。連歌を詠むのを

巻くというが、その巻く上での規則即ち式目は繁雑多岐に亘る。席上では書記進行役の執筆が詠句の瑕を指摘する役を担っていたようだ。席上詠み手がどのようにして式目を確認していたのかは判然としないが、時に初心者用の備忘のために大字で式目を書いて掛軸として懸ける事もあった。長谷寺に残る連歌式目掛軸はその例とされる。

光孝天皇の時代（884～887）、摂政藤原基経が年中行事御障子文を作って献上、これは清涼殿弘廂に立てられた。年中行事即ち政治を怠り無く行なうためである。これは衝立障子である。衝立・屏風が装飾や間仕切りやに用いられると共に掲示用に供される事もあったのである。

冊子、卷子に対して一枚物として折り畳んで保存する比較的大きなものを一まとめにした。大型の折本形式のもの、屏風形式のものもこれに含める事にした。まずは作品の稀少性から屏風を取り上げておく。本館に屏風仕立の航路図は1点がある。他に屏風に成り損ねた下絵が1点あるのでまとめて取り上げておく。次の2点である。

(12) 「航路図屏風」6曲1双。

(13) 「摂州薩州海上尽絵図」1巻。

(12)「航路図屏風」6曲1双は1隻が縦180cm、横360cmの豪華な作品である。本館蔵品中でも代表的逸品である。元禄頃の作と考えられているが伝来は不明である。京都の骨董店にあったものを南波松太郎先生が手に入れたものである。正式名称は不詳。本来そのようなものは無かったのであろう。図は勿論俯瞰図である。右隻は大阪から瀬戸内沿岸、巖島・岩国辺りまで、左隻は周防から長崎までが描かれている。内陸部は山並みと雲形模様とで省略されている。金色多彩色の華麗な作である。これに匹敵する同種の航路図屏風は他に2点しか見た事がないと、かつて松木先生の言われたのを思い出す。航路図屏風の代表的な作

品である。が由来が分からない。

後述の卷子本航路図絵に似た所も多いゆえ稍洋しく辿っておく。海は波模様で示される。陸は重畳する山々、点在する松樹によって象徴的に描かれ、それも内陸部は雲形模様で隠されている。稀に高山が描かれている所もある。目当てであろうか。海岸部は要所要所に地名が記入されているものの多くはない。城、寺社、村落が点描され、そこ分かるようになっていいる。但し名称が無ければ海岸も城も社寺もどこことって特長の無い絵の連続で、どこがどこやら分からない所もある。半島・岬・大島などは大きく強調して描かれている。

金色は金箔のように見えるが、金箔でなく金泥を塗り仕上げたものでそれも後に補修されたものの可能性があるとして京都の経師大入の人に教えられた。

大阪木津川口には北に天満天神が描かれ、その南に橋が三本大きく渡されている。堂島川、土佐堀川に架る天満橋、天神橋、難波橋である。この三大橋は大阪の象徴的図版の一つで卷子本にも多く見る事が出来る。更に下流に淀屋橋、田辺橋、越中橋が見える。川口には九条島、四貫島、伝法が描かれる。大阪を南に下がれば御城、住吉大社、堺、和歌山城、紀三井寺などが描かれている。大阪を西に行くと中津川、尼崎城、大物と続き、和田御崎、楠正成石塔、清盛塚などを経て明石城に達する。かねかけ松があり、遠くに武庫山、摩耶山が聳えている。淡路島が大きく横たわる。西国長崎は市街地が特に大きく描かれ、出島、おらんだやしきも見える。平戸、五島が随分遠く離れてある。

航路は赤い線(朱引)で示され里程が記入されている。関東舟路が紀州沖に指示され、南蛮舟路が長崎沖に指し示される。内海の島々は夥しく、島々の間を縫って航路が走っている。

(13)「摂州薩州海上尽絵図」1巻。縦92cm、横540cm。現在は卷子仕立で裏打補強されているが屏風の下絵である。画面は右雙に当たる東1から東6まで、左雙に当たる西1から西4までから成る。6曲1双の左雙2曲が欠けたのかと一見思わせるものの、西4で既に薩州、対州が描かれているので画面はこれで完成している事になる。

東1は大阪川口、九城島、四貫島、伝法が描か

れ、西4には対馬、五島、薩摩、屋久島、種子島、硫黄島(後寛配流嶋)までが描かれる。絵は丁寧でよく画けている。瀬戸内、四国、九州の海岸線と島々を中心にかなり細かく描く。奥に「下関松前迄海上尽絵図」と書かれた題僉らしきもの(10×2cm位のもの)が貼布されているが、本品のものとしては少々おかしいものである。

海路図屏風の絵柄と卷子仕立の海路絵図の絵柄とは実はよく似通っている。屏風の下絵の他に、あるいは卷子本の下絵かと思われるものもあって、こういうのは墨一色で荒くごちゃごちゃと無闇に書き込まれているという印象が強い。それが屏風・卷子として出来上がってくると絵画的な作品として仕上がってくるものと思われる。

仏画では菩薩や夜叉やの下図が伝わっている。絵師は注文に応じ、これを手本に画いたものである。海路図の場合も同様な事を想定してもよいと考えている。同じ所と同じ目的で描くものだから風景画のようによく似通った絵柄になるのだとも云えるが、そうではなくて、同じ手本を元にしていいるからよく似たものになっているのだろう。

屏風になるか、卷子になるかについても決定的な理由は無いのかも知れない。本館蔵の卷子本海路図に「海路絵図巻」(仮題)1巻がある。堺を出発地とする南海路絵図である。緑青部分が剥離しているが逸品である。最近複製品を作った。ある時、石田憲治先生が、これと堺市博物館蔵の「西海航路図屏風」の下半分とがそっくりだと言いだ始めた。果たしてその通りで、本館蔵の「海路絵図巻」は堺市博物館蔵の「西海航路図屏風」の下半分に相当するものであって、申し訳ない事に堺市博物館ではその事を既に指摘されていた。同じものが2部作られ、一方は屏風に仕立てられて、一方は上下に断たれて卷子に仕立てられているのである。上下に断ったのは元の儘では卷子としては大きすぎるためであろう。上の部分即ち西海路の卷子も恐らく同時に作られたであろう。何時か分かれ分かれになって、その片破れの南海路絵図が珍しい作品として孤立してきたのである。

一般的な事として云えば、一枚物は卷子物に較べると絵画的描写には重きを置かず、地理的状况を把握する事を主とするものが多いと思われる。但し屏風や卷子の下絵などは別である。卷子本の全てが絵画的要素の濃厚な作品とはとても云えな

いにしても大方はそのようなものである。一枚物はまずは殆どが彩色があっても単純であり、白描線のものも多い。絵画的要素も少なく沿岸地域・航路・針路等を中心に描かれているようである。図面の形、大きさも一つの大きな要素である。何を一枚物にし又卷子本に仕立てるかには選択が働いていたものと思われる。

閑話休題。一枚物の航路図を選択する際に最も困惑したのは沿岸海岸絵図と何によって区別出来るかという事であった。特に地域の沿岸絵図の場合、対岸や隣接地域への海路なり針筋なりが陸路が描かれるように示されるのは自然であり、多くの絵図がそのようになっている。取り敢えずは、地形を正確に描いたり、立地状況を概括的に描いたりする事が目的で、海路は付随的に書き込まれたものと看做され得るものは沿岸絵図、海岸絵図として扱い、海路図からは省く事とした。そのようなものに次の絵図がある。後日の為に上げておく。あるいはまだ追加すべきものが残っているかと思う。順不同。

紀淡海峡沿海絵図

播磨灘大坂湾沿岸図

明石方至佐田岬佐賀関至鶴見崎沿岸細古図

予州青嶋灘周防灘近海略図

薩摩大隈日向之図

硫黄灘周辺海岸地図

伊勢湾沿岸図

駿豆相武房総沿岸図

駿州清水港見取図

伊豆戸田港

伊豆下田港

八丈島沿海図

琉球三省並三十六嶋之図

蝦夷之図

北蝦夷千島図

一枚物として取り上げる資料は次の通りである。

(14)「曲寸准里内海深淺濱浦図」1 鋪。嘉永6年(1859)刊か。

(15)「改正東海舟程全図」1 鋪。天保11年(1840)刊。

(16)「八箇州航路之図」1 鋪。文久3年(1863)刊。

(17)「撰海一覽」1 鋪。文久3年刊。

以上は刊行物である。

(18)「西国海上之図大坂ヨリ肥後ノ国迄」1 鋪。

(19)「撰豊通船路程記」1 鋪。安永2年(1773)写。

(20)「従大坂至長崎海路図」1 鋪。

(21)「従大坂至伊勢国川崎海上之図」1 鋪。

(22)「従赤間関至浪華城海上絵図 海上略図」1 鋪。以上は折本仕立である。

(23)「瀬戸内写図」1 鋪。

(24)「自浪花東部海路図解」1 鋪。文政9年(1826)写。

(25)「四国兵庫大坂ヨリ江戸迄海路図」1 鋪。

(26)「大坂ヨリ伊良古崎迄海路図」(仮題)1 鋪。

(27)「海上初心鏡」1 鋪。安政5年(1858)成。

(28)「北海大廻之略図」1 鋪。

(29)「東海大廻之略図」1 鋪。

(30)「海上船道図」1 鋪。

(31)「大日本海上航路湊地名里数鍼當之図」1 鋪。一枚物は以上18点になる。先ずは刊本から。

(14)「曲寸准里内海深淺濱浦図」は嘉永6年(1853)8月の江川坦庵の測量図「内海深淺図」に基づくものであるが刊年不明。縦96cm、横66cm。武州江戸を最北に江戸湾、房総半島、伊豆半島を東西に、大島、御倉島を経て、中央部のみに紙を継ぎ足して(縦47cm、横16.5cm)八丈島から小笠原諸島までを描く。各島の間の里程を記している。「八丈島外六島共四方岩根ニシテ屏風ヲ如立 雖湊無引舟シテ容易ニ不入」「無人島一名小笠原島文祿中小笠原貞頼始テ到干此島故云尔」などの注記がある。凡例に依れば、国境・郡界・城并陣屋・駅市・村名・国名と共に往還航路が記され、江戸からの里数が記されている。御台場が細かく記入されている。「斯図水路ノ遠近ヲ一日ニ瞭然タル事ヲ主トシ魚獵ニ浮遊スルモノ浅深ヲ知シカ為ニス、方位ニ至テハ皆異ナリ 山川村名又然リ 唯其大概ヲ記ノミ」という。水深を記しているのである。

厚紙の元表紙があり、題僉が附されている。表紙左下に「小花」(おばな)と墨書されている。旧所蔵者であろう。残念乍ら裏表紙は無い。

この資料は海路図というよりも海図、地図と云うべきもので、一旦は取り上げるのに躊躇した。当館蔵のものはこの地図を用いた後の書き込みゆえに極めて貴重なものとなっている。それでここで取り上げて置く事にした。「内海深淺濱浦図」は小笠原諸島までも描いている点でも珍しいもの

と云える。以下に地図上に書き込まれた航海図及び注記、表紙の署名について触れておく。

文久元年(1861)幕府は小笠原島の所領に関し諸島を調査すべく咸臨丸及び随伴船千代田丸を派遣した。外国奉行水野忠徳、目付服部帰一を主班とする90余名で、通辞に中浜万次郎が同乗している。外国奉行定役元締佐として小花作之助が咸臨丸に乗船している。12月4日品川沖を出港、途中悪天候に遭い12月9日父島湾に入った。

地図上の書き込みに注目してみよう。品川沖に三本櫓の船が描かれ「咸臨丸 十二月四日四ツ時出帆」とある。そこから点線で航跡が記される。猿シマ沖を経て浦賀に到り、浦賀を出帆して南下、岬沖を経て大島の西に出る。大島を左手に見て南下、利島の東沖に出、新島東沖、三宅島東沖を経て御倉島東沖までが記されている。その所々に注記が見える。浦賀の沖合に「四日八半時頃着帆、五日六日碇泊、七日朝五半時出帆」、浦賀と大島西沖との点線脇に「此辺白昼」とあり、利島東沖に「此辺ニテ日没、雨風烈利島新島共不見」とある。三宅島東沖を南下、「此辺ヨリ以下大浪上カモメニ似て翅長ク先黒キ鳥飛行す 是度九郎と唱ル趣ニ有之」と云う。信天翁のことか。航跡は御倉島東沖で止切れている(地図の最下部端に当る)がそこに「九日夜ヨリ西風烈東へ流レ 八時頃度を計り見るニ八丈之東ニ当り候趣 然ルニ西風益々強ク八丈ニ到るあたはず 評議之上直ニ小笠原島へ針路ヲ取候様評議 未ヨリ巽ノ方へ帆前のみニ而航す 同夜十日とも同断 十日夕刻ヨリ午未之方ニ針路ヲ取 十一日未申之方江行 何れも帆前 此程之風様ニ而平均西洋一時之間ニ日本里数凡式里半到候趣ニ当也 十二日時夜ヨリ風無也候而 今朝より蒸気ニ而航す」とある。これで全部である。

この記事は誰が書いたものなのだろう。表紙左下に「小花」と所蔵者らしき名があった。市販の地図に文久の咸臨丸の小笠原島探検の航路が記事と共に記されているというだけで既にわくわくとしているのにこれはまた。この小花はか的小花作之助の事ではないかと思うのである。小花作之助は手記を残しそれに基づいて明治になって山名石之助が「小笠原島志」(明治39年、春陽堂刊)等を編述したともいう(大熊良一「歴史の語る小笠原島」昭和41年、南方同胞援護会刊)。小花作之助(1829~1901)は咸臨丸帰航後も島長として小笠原島に残った。維新後

は内務省に出仕、明治7年12月、経験を買われて小笠原出張所長として再び現地に渡った。文久の咸臨丸探検には絵師として戸田采女正家来宮本元道が加っており、「小笠原島真景図」を伝えている。同資料表紙の小花氏は所蔵者にすぎず、書き込みは別人という可能性も勿論あるとはいえ、小花作之助の記したものと考えるのが自然ではないか。

(15)「改正東海舟程全図」は序文の天保11年(1840)が刊年か。改正とあるがこれ以前に同書があったのではなく、これが元々の題名なのである。凡例に依って概要が分かるので少々長くなるが引いてみる。「余名港ニ遊フ年アリ 船戸伝ル所ノ舟程図凡若干ヲ覽ル 異同互ニ有 道従スル所ヲ知ラズ 余於是別ニ一図ヲ製シ涉済ノ一助ト為サント欲ス 乃赤水長氏ノ輿地図ニ因リ 舟路細見記汐路記等ヲ参政シ偏ク舟師ハ経涉ニ老タル者(9字省略)数四ノミナラス 猶且其要領ヲ得ル事能ワズ 後石港一舟師某者所蔵ノ一秘書ヲ得タリ 累年経涉買得ノ記スルモノナリ 頗考據スベシ 於是石港ヨリ江戸ニ至ル辺海ノ体勢暗沙伏礁港湾ノ便否(7字省略)瞭然タル事ヲ得タリ 遂ニ旧図ニ就テ其訛謬ヲ改メ遺漏ヲ補ヒ以テ此図ヲ製ス(34字省略) 天保庚子 松竹深処主ノ誌」と。縦72cm、横177cm。

文中の赤水長紙は長久保赤水の事、その輿地図は恐らく「改正日本輿地路程全図」であろう。同書は初版は安永8年(1779)頃の刊行で、改正の角書は無い。改正を付した版に、寛政3年(1791)版、文化8年(1811)版、天保4年(1833)版、天保11年版、弘化元年(1844)版、刊年不明版がある。

「改正東海舟程全図」は宮古から下田までの海陸道程記で、経緯度と記入、朱線で海陸の道程を記したものである。一部彩色された国郡と共に、記号によって暗礁、停泊港を示す。各所に航海入津里程等の記事があり「汐路之記」「航路細見記」が引用される。「航路細見記」は刊行時期を考えれば元禄15年刊の「大日本航路細見記」の事かとも思えたが、周知の「日本航路細見記」である可能性が高い。東海の海路図は当時でも珍しいものである。本館蔵のものは保存状態がよくない。

なお、航海記録図は航路図としては扱わなかった。本館には屈指の資料「開成丸航路図」がある。安政6年(1859)仙台藩の建造した西洋帆船の航

海記録図である。寒風沢港を2月12日に出帆、同17日浦賀港に入港するまでの航跡記録である。沿岸部のみが描線で正確に描かれて要所要所に地名を記す。海岸線のみが薄青く彩色されている。その沖合に開成丸の航海航路が日時と共に記入されている。最も簡潔で必要な情報が記載されている東海航路の図である。

(16)「八箇州船路之記」は文久3年(1863)刊、京都一貫堂版の絵図で、縦43.5cm、横68cmの簡素な刷物である。八箇州は摂津和泉紀伊阿波讃岐淡路播磨備前である。絵図は淡路を中心にして大阪が右下に描かれている。海は青、陸は黄、山は緑、淡路は濃青、国名は赤でと鮮やかに彩色されているが、地図そのものは単純である。国郡名の他に城下、国界、航路、御台場、社寺が合紋(記号)で記入されている。小さな四角い紙面に多くの情報を収めるものゆえ、実際とは異なる地形もあるが、地理的概念を得るにはこれで十分役に立ったものであろう。一貫堂の跋に「此図ハ浪花ヨリ近国の渡海而已を使用して航路の筋湊海辺の地名を細密になしたり(中略)猶諸方船路の記ハ世の数本に譲て不審と云」とある。「汐路之記」や「日本船路細見記」の存在を前提にした絵図である。

(17)「摂海一覽」は文久3年刊、空洞山人誌、備前西門邸蔵版というものである。固有名詞はいずれも不明。凡例に依れば、伊能忠敬の測量を基本に他の諸図をも参考して作ったものという。大阪川口から淡路由良、紀伊加田・田辺までの図である。天保山新御台場を記す。干潮時の水深が記入されている。航路も記入されているが海図の要素が強い1枚である。縦68cm、横59cm。

刊行物は右の4点である。一枚物、卷子本に限らず現物を見ていなくとも説明によって凡そ想像でき概略の分かるような記述内容にするにはどうすればよいのだろうか。資料の外部的事実、名称・外題内題の有無・奥書等の有無・作者・寸法・装幀・彩色の有無・絵図の巧拙・地理的記述の範囲・航路誌的記述・航路等の描き方等を並べてみたとしても具象的な絵図が目の前に浮かんでくるとは思えない。結局自分の知っている絵柄に当てはめて想像するより外にない。そういう事を承知の上で以下も取り上げて行く事とする。

(18)「西国海上之図 大坂ヨリ肥後ノ国迄」は折本仕立て縦28cm、横732.6cmのものである。但し地図部分は510.6cmになる。「春翠文庫」印有り。

絵図は紀州雑賀崎から岸和田、大阪川口を東端にして徳島の北部を含めて初まり、瀬戸内を経て肥後までが描かれている。大阪は木津川口、三軒屋、伝法口が描かれるのみで古体な感じがする。全体に地形は必ずしも正確を旨とはせなかったように見えるものの、よく描かれた立派なもので現実を髣髴させる力強さがある。半島、岬、島嶼等は詳細に示されている。海路は記入されていない。

里程が要所々々に「奴嶋ヨリ阿州徳島へ七里」「撫養ヨリ奴嶋へ六里」の如く細かく記入されている。また航行上の諸留意事項がこれも詳細に記される。「此ハントウニテ潮待ス」(六ヶ浦)「堀コシ此間三所五六タン舟ハ通也干潮ニ不通」(大ヶ浦)「カラミヨリ丑寅ノ方 カラミヨリ四五丁程沖北ノイソノ間ト二三丁ホドアリ」(室津沖)「大タブ東風西南風潮カ、リ 同所ノ内西ノ方ニ瀬カ、リ 但下ノ時ヲモカチニソイテノルベシ」(大タブ)などのようである。

絵図は地形の必要に応じて南北に紙を継ぎ足して描いているため縦が80cm位になる所もある。

巻初に大阪から各地への里程、潮の満干、巻尾に肥後熊本から各地への里程等の記事がある。全てを再録するとかなりになる。概要のみを引用すれば凡そ以下の通りである。巻初の大坂からの里程には「大坂ヨリ長門国下之関へ海上百三拾里半」を匹頭にして以下、阿波、奥州タナブ、肥前長崎・龍蔵寺・嶋原・大村・ナゴヤ、唐津、五嶋、肥後天草・熊本への里程、更に壱岐、対馬、高麗釜山、大明ホクチウまでの里程を掲げ、一転して大阪から筑前福岡、豊前小倉・中津、豊後鶴崎、薩摩鹿兒嶋・棒之津、伊予松山・今張、讃州高松・丸亀、長門府、周防久多松・三田尻・上之関、安芸広嶋、備前鞆・福山、備中笠岡、備前岡山、播磨姫路・室津・明石、尼崎・大阪・堺、淡路須本・岩屋、紀州和歌山と多方面に亘り、「同所ヨリ江戸へ舟路式百式拾六里」で止める。江戸まで226里が他の海路図と常に一致しているというのでもない。

次いで「潮依所有替更」と大阪川口、備中白石、周防サウシ、筑前山家御崎、肥前川嶋の干満の差を掲げる。

巻尾の記事は更に多彩である。先ず「熊本ヨリ

小倉へ陸路四拾弍里」から始めて以下鹿児島、豊後鶴崎、長門下之関、肥前龍蔵寺・長崎、高麗釜山、薩摩棒之津までの里程を上げる。次に「大坂ヨリ棒之津へ西へ廻り三百六里半、但南へ廻り海上弍百九拾六里」の箇条がある。この里程は巻初の大坂から坊津まで281里半とは異なっている。資料が別々ものなのか。次いで長崎から中国各地及び阿蘭陀への里程が掲げられる。長崎から阿蘭陀までは12500里とある。唐への航行上の注意事項までが追加されている。

(19)「撰豊通船路程記」は奥に「安永二癸巳春於船中写之」とある縦21cm(最長部分42cm)、横157.3cmのもので年代が記載されているものでは一枚物中最も古いものである。裏表紙に「園田」の名があり、船中に用いた用具、飲食物等を羅列している。

撰津から豊前小倉までの通船図で、瀬戸内の島嶼が詳細に描かれている。大阪は伝法、木津、住吉の名のみで細かい描写はない。「貞享元年大坂安治川ナル」の記事が見える。左端があるいは10cm位切れているのかもしれない。

(20)「自大坂至長崎海路図」は縦43(最長部86)cm、横1216cmの大型の折本仕立のもので下部を折り込んでいる。絵図は丁寧美しく描かれている。惜しい事に水が入り破損が、特に折り目部分の破損が著しい。大阪から瀬戸内を経て長崎に至る海路図で、平戸、五嶋、対馬までが描かれている。巻末に「文化八年辛未六月日 於対州府中金石写 富永方武」とある。

絵図は大阪から西に尼崎城、鳴尾崎、今津、西宮、ワウギ、ヲイシ、ミカゲ、カウベと地名が上がり、尼崎城、甲山、摩耶山が目当てに描かれている。大阪は淀川、大和川、平野川、天満橋、難波橋、御城、中ノ島、安治川、木津川、新地、九条嶋新地と丁寧に描かれている。航路は赤線で凡そを辿るのみである。

「大坂川口ヨリ江戸品川迄二百六十三里余 長崎迄二百廿一里半 対馬迄二百三十七里半 五嶋深江迄二百二十八里」と里程を記す。里程が種々の数字で伝えられている。何か系統があるのかも知れぬ。

(21)「従大坂至伊勢国川崎海上之図」は縦40cm

横558cm、一部分縦に24cm程継ぎ足している。外題僉には「従大坂伊勢国至川崎海上之図」とあるが、右の内題の名称が正しい。前書に名の見えた富永方武蔵書之印」がある。好事家であろうか。

地図は紀伊志摩の国境からは紙を継いで南部分を描いている。川崎以東の尾張、三河国境から伊良古崎、刈谷辺までを含む。「大坂ヨリ伊勢川崎迄百十六里」とある。大阪そのものは図示されていなくて淡路由良、紀伊西端から描き初められている。海岸線のみが描線で書かれ、主要地名を記入した簡素な地図である。航路は朱で所々示される。砂洲等が注記され、線崎鼻や九鬼鼻やに灯台が描かれている。所々に「カマコヨリ大嶋迄南ノ方江乗ル熊野横手ト云 兵庫ヨリカマコ迄十四里」などの記事がある。

(22)「従赤間関至浪華城 海上略図」は縦39cm、横200cm、折本仕立である。大阪木津川、安治川から赤い航路が出ている。紀伊北井崎、阿房辺から瀬戸内を描く。伊予、讃岐部分は紙が継ぎ足されていて折り込むようになっている。本州側を下に、四国を上配し、四国は淡青色であるが本州側は国毎に色分けしている。派手な図に見えるが実際は海岸線のみが描かれたものと変わりなく簡単な絵図である。

書き込まれた湊地名は国々によって多寡がある。備中などは簡単、備後は詳細になっている。陸地には城の他に讃岐富士などの山が描かれている。島嶼も細かく画き分けられ、それぞれ名が記入されている。瀬戸内航路と共に、四国本州間の道程、島嶼間の航路を記したものである。絵は稚拙といつてよいものだが、この程度の大きさなら広げて見るのに丁度良い。主要な地名があり海路島々を辿る事が出来るというものである。

(23)「瀬戸内写図」も縦34cm、横198cmの簡単な絵図である。大阪から広島八代島辺までが描かれている。本州四国の海岸線が描線で示され、地名が細かく記入されている。島嶼も詳細である。航路が本州四国沿岸にそれぞれ書かれている。大阪は伝法、三間屋、木津が示されるのみで、絵は拙劣であるが地形は把握できるように描かれている。

図面上に里程が「大坂ヨリ和田御サキマテ拾里」「大坂ヨリ蓬島マテ拾六里」「明石ヨリ室マテ拾三

里」のように記入されている。

この里程とは別に別筆の里程一覧が書き付けられている。「広嶋ヨリ大坂迄海上八十八里有、陸地八十二里有」とあって、広嶋より白波へ壱里」以下各港間の里程が細々と掲げられている。大阪川口に至るまで77の地名を数える事が出来る。これで凡その事が分かるというものだが個々の湊名は省略する。

(24)「自浪花東都海路図解」は縦218cm、横369cmと大きな図である。文政9年写とある。

大阪川口から江戸品川までの絵図である。大きいだけでなく見た目も奇麗に描かれている。海事資料館時代のパンフレットに「江戸大阪間の海路を画いた大図。特に紀州沿岸は拡大して画かれ、暗礁の所在、港の出入にあたっての注意事項などを極めて詳細に記入してある。幕末異国船が日本近海に出没し始めた頃、いつ出動を命じられても困らないように、紀州藩のお舟手が江戸までの沿岸を調査して作ったものではあるまいか」と解説されている。

正方形に近い左半分が紀伊半島に当てられて、画面に入れるため少々左に寄ったいびつな形に描かれている。尾州から武州まではためにやや縮約されたようになっている。

図面の西端は一の谷、和田岬辺で、東に向かって湊川、生田川、大石川、石屋川、住吉川、芦屋川、夙川、枝川、武庫川、ヨモギ川、尼ヶ崎川、伝法川と細かく描かれる。大阪は安治川、尻無川、木津川があり、堺港の波除けの石垣が大きく鮮明に画かれる。南は八丈島まで、東は安房の東端までが画かれる。諸所に里程と針筋が記される。「加田ノ瀬戸ヨリ大坂川口江寅卯ニアタル」「大和川口ヨリ加田ノ瀬戸江未申ニ当ル」のようである。単純な海路は記入されていず、すべて針筋で示される。波除けの石垣は堺港以外にも見え、「此処水底ニ小磯アリ」(加田ノ瀬)の如き注意事項も諸所に記入されている。陸上には東海道他諸街道、道路が赤線で記入されている。この図面が紀州藩のものである事は構成からも分かる事だが、「紀伊殿菩提所」が有田川の北、根津の東方に描かれている事によって確かめられる。

画面に描かれた船の帆に2様がある。一は絵画、客船帳などによく見る四角い帆、一は三角の帆で

ある。三角帆は品川沖に6隻、浦賀沖に2隻見え、これについては黒船ではとの考え方もある。よく見ると紀州大島・田辺沖、摂州和田岬沖にも描かれている。ペルーの来航はまだだが文政8年には異国船打払令が出ている。特に英国船が浦賀や水戸に姿を見せている時代である。

図面上部に枠取りした記事がある。「自浪花東都迄海路行程」として「大坂安治川口木津川口ヨリ紀州加田江十三里 紀州加田ヨリ大岬江六里」以下、品川まで28地名間の里程を掲げ、「行程合二百四十五里」とある。次いで湊の出入、潮の干満等に関する五箇条を掲げている。「一、図面に船路針筋不遅トイエドモ風波汐行従船乗廻針筋ヨリ船沖江出ル事モ有之 又ハ地方江寄添事モ可有之 峯々鼻々嶋々磯々其場所之神社佛閣之森人家之屋根極星双方共見競 水之磯乗変スべき事或者夜中ニ成ハ円暮迄ニ山々方位見積リ針筋ヲ可定置(下略)」のようである。

「于時文政9年写之(花押)」とあるが、写は写本という意もあると共に、写真、写生の語が語るように実物そのままを写すという意もあり、これも江戸時代一般の使い方であった。この場合も別の図を元に写したというのではなく、あるがままを写し取ったとの意であろう。

(25)「四国兵庫大坂ヨリ江戸迄海路図」縦33.6cm横97cm。海岸線のみを描き主要な湊と里程とを記したもの。西は摂津塩屋・兵庫辺から淡路の一部を含みながら初まる。四国は描かれていない。表題の四国はあるいは西国かも知れない。東は安房、上総、下総、武蔵まで。

「熊野大嶋ヨリ伊豆下田迄直乗朱引也」の記事がある。裏書に「此絵図古式ニして尾三の境を矢作川と記せしなり、池鯉鮒を尾張の国とあり、往古ハ国境を矢作川とせし書も見ゆる也」と見え、又題僉・同筆で「大田傳平堯蕃」と書き付けた紙片が貼られている。

(26)「大阪より伊良古崎迄海路図」は内題、題僉等が無く、右の名称は仮題である。縦50cm(最大幅)横874cmの長尺の絵図である。

地図は紀伊半島もすべて半面化して真横に連続しているように描いている。このような描き方は他の資料にも見られる事なので地図の描き方の一

つとして在ったものと思われる。大坂から西は湾曲して描かれ、尼崎から塩屋までが紙を継ぎ足して上部に描かれている。その塩屋沖に淡路が大きく横に描かれている。絵そのものは拙劣である。西は塩屋、垂水辺から東は三河、伊良古岬、神島等までを収める。志州、三州の辺りは元々は絵図が更にあったものが失われた可能性もある。

地図は各国々の海岸線のみが描かれ、諸所に常燈、日和山、磯、入江等が記入されている。海路は赤で凡そが示される。「水底ニ磯アリ」の如き航海上の注意事項、「神嶋ヨリ伊良古崎迄此間二里」「タウシ浦ヨリ神嶋迄此間一里」の如き詳細な里程が記入され主要地名が書き込まれている。

表紙裏に「名所旧跡図会水路里程并ニ神社仏閣調符附」と墨書されている。里程が別掲されている。「自摂州大坂同兵庫迄十里 淡州須本迄二十里 泉州岸和田まで七里 紀州加田迄十六里（以下、和歌山、由良、大島、那智、勝浦、新宮、志州安乗と続く）」、更に鳥羽から豆州下田、相州御寄・浦川を掲げ、「武州江戸迄二百三十六里」とある。

(27)「海上初心鏡」は安政5年(1858)、宮本清治作のもので、縦93cm、横204cm、細かく美しく描かれた絵図である。「毛山文庫」「穴戸蔵書」印が有る。地図右下部に赤枠があり「海上初心鏡凡例」とあるので題名が分かる。

東は大阪から南に下って紀伊日ノ御崎辺りまで、西は岩国、笠田島までと九州の一部、杵築、佐伯辺まで、四国全島が描かれる。淡路島、笠田島、高島、ムク島、ホト島の立体図が周囲の余白に別に描かれて、航行上の留意点が記入されている。四国の地名は瀬戸内側のみが詳細である。全体に地名は詳細で、木津川口、安治川口、テンボ川、尼崎、イマヅ、ナルヲサキ、西ノ宮、ウヲザキ、ヲキ、アシヤカハラ、ミカゲ、住吉カハラ、トウメイ、ヲイシ、ワキノハマ、湊川、兵庫、和田ノ鼻と実に細かい。「サカイ内へ入テハ何風ニテモヨシ 但入口アサシ潮三四合満ナラデハ入カタシ」のような航行上の注意も見える。比較的小さな画面のため全体に文字が小さくなっている。

「海上初心鏡凡例」では色、形によって航路、波渚、磯、洲、人家、中ノ湊、極上ノ湊等を区別して示す旨の箇条その他がある。奥に「右凡例

ニ申待ル如ク多年海上往来ノ度毎ニ見覚エ聞覚タルコトヲ前ニ具サニ図シ 海上初心鏡ト云大図ヲ著シ侍リテ 君公ノ尊覽ニ奉リシヲ 縮図ニシテ官船ノ捷覽ニ奉レヨト仰事アリケレバ 原図ニ據リ日夜沈思シテ 凡月ヲ閲スル事十有五月ニシテ図シ畢リ侍リヌレド識浅ク学拙ク 大小ノ島山磯等ニ至リテモシ遺漏有ンコトヲハ再ヒ仰事有ラバ補ヒ奉ラント 再拜稽首謹言 安政五戊午歳仲原 宮本清海誌(印)」のようにある。豊前あたりの大名家のものか。保存状態はあまり良くない。

(28)「北海大廻之略図」は縦27cm、横145cmの簡素簡便な絵図で、日本海沿岸、秋田能代辺から長門下関・若松、金崎辺までが描かれている。青島、佐渡島、能登半島、竹島、隠岐島、ニシマが配されている。正確な地図ではなく部分々々の特長を捉えたような絵柄で、島は実際よりも大きく描かれている。青く塗られた海岸線のみを簡単に示し、ごく主要な地名だけが記入されている。海路はなく針筋のみが簡単に示される。

(29)「東海大廻之略図」は縦27cm(最長部60cm)、横200cmの簡素簡便な絵図である。上記「北海大廻之略図」と同絵柄のもので同時に製作されたものという印象を受けるが、二つの地図が連続しているのでもないようだ。江戸品川から淡路、紀伊加田辺までが描かれる。地図は海岸線のみが概略描かれるのみで、正確な再現ではない。紀伊半島も長く平面化して描かれる。左端25cm位が上部に紙を継いで紀伊半島北部を縦に描いている。主要湊地、大川、高山等が書き込まれる。針筋のみが示される。

この2点は絵図としては簡単なもので観賞に堪え得るものではないが、経験のある船頭等にとっては最も実際的なものであったものであろう。

(30)「海上船道図」は縦65.6cm、横183cm、西は摂津、播磨明石、淡路から東は安房、上総、下総、武蔵までが描かれる。絵柄は(24)「四国兵庫大坂ヨリ江戸迄海路図」に酷似する上、「熊野大嶋ヨリ伊豆下田迄直乗朱引ナリ」の記事のある事も一致している。同資料からの写しか、各々が写本関係にあるものかと思われる。「ランマエ崎ヨリ下田江十二里 ランマエ崎ヨリ清水十八里」の如く里

程が記入されている。陸上には東海道が見えている。

(31)「大日本海上航路湊地名里数鍼當之図」は対馬から松前までを含む海上絵図で、名はことごとしいが縦130cm、横156cmの小型の絵図である。ごく主要な地名のみが記入され簡単な針筋が示される。針筋は「武州江戸品川ヨリ羽根田渚辰巳針當」「羽根田ヨリ神奈川迄西ノ針當」「神奈川ヨリ相州浦賀迄辰巳針當」のように示されている。同様に里程が「武州江戸ヨリ神奈川迄海路七里」「神奈川ヨリ相州浦賀迄同七里」のように記入される。画面東北に磁石の図がある。

以上で一枚物については終る事になる。以下冊子で以前見落としていたもの二、三を取り上げておく。

(32)「日本国浦々里程之図」1冊全9丁。

この書名は仮のもので外題内題ともになく、複数内容の最初の記事を書名として掲げたものである。他に「垂細亜一大洲之図」を含む。

「日本国浦々里程之図」は、松前から本州、四国、九州までの概観的日本地図に主要港湾を記入し、各々の間の里程、針筋を示すものである。

「江戸相州三崎ヨリ青森迄但シ東廻り方角」

「摂州大坂ヨリ江戸迄但シ南海廻り」

「九州佐賀関ヨリ下之関迄但シ九州大廻りと云」

「伊予地嶋間淡路岩屋ヨリ松山三津濱下り但シ瀬戸内下りト云」

「伊予ゴユ嶋ヨリ豊後エ崎下り但シイヲナタ渡海ナリ」

「下之関ヨリ松前迄北国大廻り方角」

のように海路の区別が見られる。

後序に「此術を得時は大洋へ吹流れ地方の目的を失ひ本国の方角わからずいかん共すべき要なき時、忽ちに其方角を得て帰帆する事疑ひなし、以此法舟に乗るに於ては星度を測に諸器を以てす、雖然洋中に於て四面に山地方なく、依之天文に随ひ南北の極に及亦ハ諸星をさし星暦の行度にもとづき測りて其地に於る事少も差を云事なし(下略)」とあるように天文航法を述べたものである。八線三角の術と称す実測術で、伊崎先生の考案による法という。これによって国郡の広狭、山谷の高低、道路の遠近、田野の求積、検地の正違に応用でき

るものという。序の筆者は門人の高本性である。

次の「垂細亜一大洲之図」は全く別種のものが合綴されているものと思われる。「エソ日本カラ天竺朝鮮満洲琉球合而一大洲ト云」とある通りの地図を主とするものである。

日本を中心に南は小笠原嶋(女人嶋トモ云)、西は琉球、大ワン、大清、朝鮮、満洲、北は松前、エソ国、クナシリ、ヲロシアとある。北海道は松前から西に広がるように大島として描かれ、クナシリはその更に西の海上にある。「カゴ嶋ヨリ琉球乗午五分」など針筋が一部示されるものの航海図ではない。「北極出地別巻記ス」とも見える。

次の2冊は前回で取り上げた刊本冊子の補遺であり、通し番号は省略する。

「西国船路道中記」1冊。刊年不明。

題僉を失っている。見返しに「西国舟路付目録」とあるので「西国舟路」を仮の題にしているが正式には上記の通りである。奥付も欠く。最後丁を裏表紙に糊付けしている。後人の仕業であろう。詳細は省略するが、丁付に不自然な所が殊に最初の部分に目立つ。異版の一種と見られる。

「大日本海路図下」1冊。天保13年(1842)刊。

下巻のみの端本である。

様々な海路図について先には冊子・卷子のような形態の違いではあるまいかと推測したのであるが、殊に卷子本をどのように整理すべきかを思案している時に、矢張形態上の事もあるかも知れぬが、様々な航路の事かと思ひ始めた。一枚物でも西海東海北海南海と時に蝦夷千島に至るまでの航路が網羅されており、さまざまな海路図が用意されている。卷子本も大阪からの西海航路、東海航路を初めとして、瀬戸内航路、大阪江戸間だけでなく江戸長崎間、江戸伊勢間等巾広く蒐集されている。

卷子本の航路図には色々と可笑しな所がある。先ずは何故卷子なのかという事だ。仮にこの海路図が実用に供されるものであるとすれば、卷子本は取り扱い上極めて不便で厄介なものである。冊子や折本仕立が一番扱い易い。本館蔵の卷子本海路図はその殆んどが保存の良いものである。手擦れの痕や天地の皺や紙面の折れ傷などはめったに

ない。つまりは実用目的のものでなかったという事でないか。卷子本海路図は恐らくは個人的な楽しみのために製作されたものが多いのだろうと思われる。成立時や作者名やの不明な作品が殆んどである事も共通している。そのような事柄を記す必要がなかったものなのである。それは極めて個人的な物事を示唆している。

瀬戸内航路を例に考えても分かるように航路はほぼ決まったものである。それゆえ航路図は互いに似たようなものになってくるのは仕方がない。それだけでなく複数の卷子を見ていると陸上風物の描写に同じ図柄の物が幾つかある事に気付く事もある。「大坂ヨリ江戸迄海上浦々島々磯瀬船懸場所」などは本館に2部ある。「通船海上之図」の如きたわいない大部のものでさえ、2巻本と3巻本との2種が揃っている。卷子本航路図は恐らく同じ原本から幾つもの図が製作される事もあったのだろうと推測している。

卷子本の場合、表題を掲げてみるだけである程度内容が分かる所があるので、取り上げるべき書名を先ずは一覧しておこう。真辛くあらば又帰り来む。

卷子本海路図一覧（特記しないものは全て1巻）  
大坂より長崎海上船路図巻  
大坂ヨリ豊前小倉マデ海路図  
大坂より西国へ海上船路絵図  
従大坂長崎迄海路図  
従大坂海路絵図  
海路絵図巻  
瀬戸内略図  
瀬戸内海航路図  
瀬戸内海航路図  
従江府長崎迄海陸図  
海陸道中図巻  
江戸より伊勢へ海上船路絵図  
江戸より若山福良江戸より北海道浦々里程図巻  
大坂ヨリ江戸迄海上浦々島々磯瀬船懸場所針筋等  
絵図  
大坂ヨリ江戸迄海上浦々島々磯瀬船懸場所針筋等  
絵図  
日本海沿岸及び本州日本海沿岸から本州北端  
通船海上之図 中国 3巻  
通船海上之図 2巻

以下次号